

パーシング懲罰軍

参謀総長ジェネラル・ヒュー・スコットは追討軍司令官にジョン・パーシング准将を任命し、ジェネラル・フレデリック・フンストンの配下に置いた。パーシングはウエスト・ポイント1886年の卒業で、米西戦争の後フィリピンでモロ掃討作戦の戦歴を持つ。パーシングが受けた命令は「懲罰遠征 Punitive Expedition」と呼ばれ、ビヤの盗賊集団を追い散らすことであった。この中で強調されたのは、カランサ政府の主権を守り、メキシコ軍への攻撃を戒めたことである。²¹

遠征軍は約五千の将兵、三旅団からなり、砲兵や八機の飛行機を持つ飛行中隊も加わっていた。八機の複葉飛行機JN-3は解体され、3月15日、サンアントニオからトラックでコロンバスへ到着し、組み立てが開始された。コロンバスから侵入する主力部隊は騎兵及び歩兵旅団からなり、もう一つの騎兵旅団はコロンバスから八十マイル西にあるカルバーソン牧場から越境することになった。3月16日午前1時、パーシングはカルバーソンからメキシコへ入った。二手に分かれた旅団はカサス・グランデスで合流することになった。²²

三月末、米軍はチワワの奥深く三百五十マイルも入り込んでいた。カランサの口調は激しかったが、一切抵抗はせず、物資の輸送に列車の使用を許していた。カランサもチワワ州知事エンリケスも、自殺行為になるアメリカ軍との衝突を避けたかったし、密かにアメリカ軍がビヤを捕獲することを願っていた。

その願いが叶ったかに思われた。ビヤは重傷を負ったとの噂が流れ、ビヤ兵は既に四散していた。しかし四月に入ると状況は思わぬ方向へと展開する。コロンバス攻撃を生き延びた四百人にも満たないビヤと兵士はチワワ山中に隠れた。ビヤは革命に身を任せて以来はじめて、とても勝ち目のない事態に直面していた。アメリカ兵は既に五千、メキシコ人が決して手にすることの出来ない近代兵器で装備し、飛行機が山野の上空を飛んでいた。加えて、カランサ軍がビヤを壊滅させるため、そして万一の全面戦争に供え、続々とチワワに送り込まれていた。ビヤは通過する町や村でアメリカ軍への抵抗を唱えた。カランサ兵の中にはビヤに共鳴するものが多く、カランサ軍の隊長もビヤを見逃した。3月27日、ビヤはシウダー・ゲレロとミニャカ村を攻撃しカランサ軍守備隊を潰走させた。カランサ軍ジェネラルがゲレロ奪回を企てたのをビヤ軍は簡単に押し返した。この戦いで大量の武器を得たのと、捕虜八十人を説き伏せ自分の隊列に加えることに成功した。しかし、支払った代償は大きかった。ビヤは膝に傷を受け、動けなくなった。ビヤは部隊を細かく分断し、チワワとドゥランゴに分散させた。²³

ビヤ自身はニコラス・フェルナンデスの護衛で、誰にも行き先を知られないように細心の注意を払って出発した。ゆっくりと馬車や担架を使つての逃避行であった。苦痛を和らげる医者も薬もなかった。ビヤの分遣隊は部下のジェネラル・ホセ・ロドリグスの父親の

牧場に着いた。ロドリゲスはあらゆる手を尽くして介護にあたった。ホセ・ロドリゲスは三ヶ月前に既に戦死していたが、その事実は伝えなかった。ピヤは間もなく回復すると、フェルナンデスの分遣隊を更に南のドゥランゴに向かわせ、実の従弟二人のみを残した。二人はピヤをラバに乗せコスコマテと呼ばれる洞窟に入り、二ヶ月ほど身を隠した。傷は少しずつ癒えていった。24

ピヤが外部と遮断されている間、彼の分遣隊の多くが消滅した。辛うじて原形を保ったのはドゥランゴに避難した二部隊ぐらいで、最も大きな打撃を蒙ったのは、二百人いたセルバンテスの部隊であった。グレロ戦のあとでカランサ軍から寝返った八十人は、給料不払いのため脱走した。内輪もめなどで更に脱走者が続き、残ったのは同郷の者三十人ほどになっていた。これらも故郷ナミキパに帰ると、戦うのを拒み離脱した。セルバンテスは一人でアメリカ軍を襲い、騎兵に射たれた。騎兵は未だ生きているセルバンテスをロープに繋ぎ、馬で引いてナミキパのアメリカ軍本営まで帰った。顔が潰れたセルバンテスを家族が指の傷から確認した。フリオ・アコスタはグレロ戦のあと、アメリカ軍への抵抗を呼びかけ、攻撃を計画しているところ、オホス・アスレスで逆にアメリカ軍に先手を打たれ、四十一人が落命、多くが負傷し、アコスタは逃亡した。25

四月の初めウイルソンの閣僚数人が懲罰遠征軍の引き上げを唱えていた。国防長官ニュートン・ベーカーはピヤの軍勢は離散し、パーシングは既に目的を達している以上、盗賊を追いかけるのは馬鹿げていると、彼の態度を表明していた。参謀総長ヒュー・スコットも同じ意見であった。このような態度の原因となったのは、ドイツのUボートが中立国の船舶を撃沈したため、アメリカが同盟側に加わってドイツへの宣戦布告を行う可能性が高まったことによる。このような危機に直面しているときに、軍隊をメキシコに置いているわけにはいかなかった。ピヤは身を隠し、彼の手の者はチワワとドゥランゴ全域に飛散している状況下にあっては、アメリカ軍の駐留は長期に亘り、行動範囲も拡大するであろうと、ベーカーとスコットは予測していた。

パーシングは次のように報告した。メキシコにおいて我々の使命を達成するためには、困難な戦いを長期に亘って続けなくてはならない。ピヤはチワワの隅々を熟知し、メキシコ人は彼への友情、あるいは恐怖心から我々の行動を逐一報告している。ピヤは食料を持たず村人に頼り、乗り回した馬は機会があるごとに新しいのに乗り換えている。ピヤには有利な条件が備わっている。このような状況下では、出来るだけ広範囲にわたる地域を長期に占領する必要がある。更にそれぞれの地域において、出来るだけ多くの住民の支持を得て、信頼できる情報の収集が可能になるように努める。荒野を乗り越え、安定した補給線を確認し、各駐屯地へ十分な兵や動物を供給し、何時でも活力のある部隊を動かせるようにする。これ等の基本計画は既に実行に移し、速やかに目的を達成するよう努力している。26

このような方針はカランサ軍との衝突を招き、全面戦争に発展する危険性があった。グ

レロの戦いでビヤに壊滅的な打撃を与え、初期の目的を達成していたので、軍隊を引き揚げても、ウイルソンが支払う政治的な対価は小さいとベーカーとスコットは考えていた。しかしビヤの再起を恐れた財界人からの圧力を受けた農務長官デーヴィッド・ヒューストン、内務省長官フランクリン・レーンは撤退に強く反対した。ウイルソン大統領はキューバ政府と結んだ条約と同じように、アメリカが正当であると判断したときには何時でも一方的に武力介入が出来るような条件をカランサに飲ませる腹があったため、無条件に撤退することは考えていなかった。²⁷

その間、カランサ軍は日を迫うごとにパーシングのアメリカ軍に対し敵意を顕にしていた。それが最初に露呈する事件が起きた。チワワ市へ公文書を届けるため飛行機二機が使用された。それぞれが文書の写しを携え、一機は市の東側、別の機は西に着陸する計画で出発した。パイロットの一人は着陸時に逮捕され、怒り狂った群集に取り巻かれ市の牢獄まで歩き、監禁された。群衆の中にいたアメリカ人の通報で駆けつけた領事によって間もなく救出された。機体は煙草の火などで傷つけられ、二人のパイロットは離陸するまで脅かされ続けた。²⁸

第十三騎兵大隊のフランク・トンプキンス大佐は勇敢な軍人であった。トンプキンスはビヤがパラル近くにいるはずだと考えた。ビヤは盗賊時代から、追い詰められるとパラル周辺の山中に身を隠したことから、今回もそうであろうと言った。そして彼の小さな騎兵大隊は、あと十頭ほどのラバを貰えば、密かにどの部隊よりも早くパラルへ行って見せるとパーシングに進言した。

トンプキンスはビヤが南に向かったことだけは確信していた。パーシングは、ビヤが四十人ほどの部下を連れて、ゲレロから南西約百キロにある小さな村クシウイラチクから更に南に向かったとの情報を得ると、トンプキンスの助言を取り入れることにした。4月4日、パーシングは十二頭のラバ、追加の食料と銀貨五百ペソを渡してトンプキンスをパラルへ出発させた。トンプキンスの後にはウィリアム・ブラウンの第十大隊、その後にはロバート・ハウゼの第十一大隊が続いた。ブラウンはトンプキンスの左、ハウゼは右脇を庇うように進んだ。更にドッズの大隊は分水嶺辺りに潜んでいる可能性のあるビヤを求めて西に向かった。パーシングはこの四個縦隊との連絡を保つために本営をさらに南下させ、チワワ市から南百マイル足らずの位置にあるサテボに移動を開始した。国境線から三百五十マイルも南に進出することになった。²⁹

トンプキンスがパラルの北約五十マイルのサン・サラゴサに到着した4月10日の夜、カランサ軍パラル守備隊に所属すると言うアントニオ・メサ大尉がトンプキンスの野営地にやって来た。彼は電話でアメリカ軍の到着をパラルへ知らせるためにやって来たと言い、終始協力的な態度を示した。そこでは放牧が出来、野営地も準備して必要な物を供給する、と約束した。しかし朝になり電話が通じなかったことを告げると、メサは先に出発した。パラルまでは一人で一日の行程、物資を運んでいたら二日を要した。寝食充分なトンプキ

ンスの部隊は翌朝、行程二日の行軍を開始した。30

パラルに近づいても期待していた出迎えはなかった。しかしトンプキンスは自信を持っていた。彼は警護の兵と共に町の中央にある衛兵本部へ向かい、部隊を町に入れる許可を貰おうとした。あくまでも形式だけであった。カランサ兵が二階にあるジェネラル・イスマエル・ロサノの事務所へ案内した。ロサノはアメリカ軍を歓迎しなかった。ピヤは未だ北方に居るとして、トンプキンスの遠征目的に関する説明を聴こうとしなかった。トンプキンスはメサ大尉から貴殿が歓迎しているとのメッセージを受け取っていることを伝えると、メサはピヤ兵に捕らわれたであろう、とロサノは応じた。結局町の外でキャンプ地の提供を受けることになり、一時間待たされてから案内人と共に出発した。31

部隊の後を騒々しく「ピバ・ピヤ」を連呼する野次馬が続いた。トンプキンスは問題の発生する恐れのある最後尾にいた。部隊の先頭がロサノの指定する場所に到着した。トンプキンスは前方へ進み、指定された場所を見た。そこは三方を山に囲まれ、お碗の底の様な地形で、周囲からの銃撃を防ぎようがなかった。トンプキンスはこの場所を拒否した。交渉している間に、彼は万一を考え、騎兵部隊を西の山際に配置した。トンプキンスは、群集が発砲したことをロサノに抗議したのに応え、自分の責任ではないとロサノは逃げた。その間メキシコの国旗を掲げたカランサ軍が現れた。怒ったトンプキンスはロサノに銃口を向けるとカランサ軍は引き下がった。トンプキンスがロサノを放免すると、ロサノは急いで町の方戻っていった。32

トンプキンスは交戦を避ける一方、何時でも応戦できるようパトロール部隊を放ち、西方の丘に配置した部隊にカランサ軍が近づいたら発砲するよう命じた。間もなく南の丘にカランサ軍が現れた。トンプキンスが発砲する前に、隣にいた軍曹が頭を射貫かれ即死した。更に西の側面に百人ほどの新しいカランサ部隊が現れた。トンプキンスは攻撃を避け、もと来た道をサンタ・クルスへ向け後退を始めた。他にも騎兵が一人死亡し数人が重傷を負っていた。馬に乗れない者は置いて行かざるを得なかった。4月12日午後1時半になっていた。サンタ・クルスへは三時間の道のりであった。ロサノは単に追い返すだけでなく、トンプキンスの縦隊百人を殲滅しようと、後を追った。後衛部隊は幾度か追撃を退け、更に一人の死者と数人の負傷者を出しながら逃げ切ったトンプキンスはサンタ・クルスで防御を固めると、三人の伝令を出し八マイル北にいる第十大隊に助けを求めた。第十大隊が来てもロサノの部隊は去ろうとしなかった。更に第十一大隊が加わると形勢は逆転し、アメリカ軍は有利になった。33

パラルの戦闘で事実上パーシングのピヤ追討は終わった。パラルの住民が「ピバ・ピヤ」を叫んだ事はカランサを不安にした。アメリカ人への敵対行為は日増しに増えているとパーシングは報告した。カランサはアメリカ軍に撤退を求め、手始めに物資の輸送に鉄道の使用を禁止し、次にアメリカ軍に対して弱腰のオブレゴンに代えて、腹心で強硬派のルイス・カブレラをアメリカとの交渉にあたらせることにした。メキシコとの全面戦争に直面

したウイルソン政府は部分的撤退を行い、北部の町、モルモン教徒が移住しているコロニア・ドゥブランに本営を移した。この時パーシング追討軍の目的は、ビヤ捕獲から、カランサ軍がビヤを逮捕あるいは殺害するのを支援するため無期限に止まる、に変更された。

34

以前ビヤ軍として戦ったことのある武装集団が本隊を離れ、一年近くも憲政軍の手の届かないドゥランゴ山中に潜んでいたが、自暴自棄の行動に出た。隊長ナティビダド・アルバレスはテキサスのビッグベンド地区にあるディーマーズの店で働いた経験があったので、その辺りを攻撃しようと国境へ向かっていた。5月5日、アルバレスは八十人のグループを二組に分け、多い方の六十人をグレンスプリングスにある米軍守備隊攻撃に向け、自らは残り二十人を連れ、ボキヤにある店を略奪し、ディーマーを誘拐した。この襲撃による米軍の損害は死者二人、負傷者三人、さらに八歳の少年が死んだ。ジョージ・ラングホーン少佐が指揮するアメリカ陸軍部隊はグレンスプリング攻撃隊を追ってメキシコの中を百六十八マイルも入り込んで、五人を捕獲し誘拐された二人を解放した。³⁵

この事件を受け5月10日、ウイルソン大統領はアリゾナ、ニューメキシコ、テキサスの州兵四千五百人を招集し、三万八千人に警戒態勢を取らせた。³⁶

21. Friedrich Katz, "The Life and Times of Pancho Villa", Stanford University Press, 1998, P567
22. John S. Eisenhower, "Intervention! The United States and the Mexican Revolution, W. W. Norton & Co., Inc., 1913-1917, P227
23. Friedrich Katz, "The Life and Times of Pancho Villa", Stanford University Press, 1998, P571
24. Ibid. P573
25. Ibid. P575
26. Ibid. P577
27. Ibid. P587
28. John S. Eisenhower, "Intervention! The United States and the Mexican Revolution, W. W. Norton & Co., Inc., 1913-1917, P262
29. Ibid. P264
30. Ibid. P269
31. Ibid. P270
32. Ibid. P271
33. Ibid. P274
34. Friedrich Katz, "The Life and Times of Pancho Villa", Stanford University Press, 1998, P579
35. James A. Sandos, "Rebellion in the Borderlands, Anarchism and the Plan of San Diego, 1904-19, P145
36. John S. Eisenhower, "Intervention! The United States and the Mexican Revolution, W. W. Norton & Co., Inc., 1913-1917, P287